

街談文々集要

—

庫	文	閣	內
三 二 一 兩	二 七 九 八 二		和 書
六 架	一 八 冊	號	類

(一)

和書門

大架

七國

冊 號

內閣文庫			
番號	和	27982	
冊數	18 (1)		
函號	211	104	



A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM; Kodak



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり
綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり

文化元甲子
街談文々集要

世々亭芥子楊集

友人好書を贈る事とて文々

中野する虎野文文章抄集し

物とんと思ひし拙く何を

以て文々と云ひ仰る事とて初め

文々文々のちて文々の文々

事ある度の時世廿二の年抄間

見易く抄す真偽ありかゝる事

明治十三年購求

東京府立図書館

書付も公故文々集要と表題
然の事と俗談平話を旨とし文を
雅も形く思ひ出る所 拙ま筆もとく只
中下は事終るつり智じ昔のさゆを今
け仕子の目とて一席一話の程り
草あも形くんとしとく為豊茶世更
種切るし筆を拙る事あり

萬延元庚申 極月上旬

凡例

一 僕寛政土未とし妙世不世と得今六十二歳乃星
表と強より文化元甲子としハ予 年あり 知事
見しとくし事とものあり記
一 此書文化元甲子歲の月十四日とし近十四年文政元
宣とし同十二年より數度合年廿有る事の
間江都及近在支那蠻國等迄聞きと記
一 角能の起願記戲場の年代記或ハ年々の評判記譲り
多し是れ我々異変奇談等の端載る 昔坊権執事
当り流石と云ふ或ハ見せ物と云ふ
一 都より高名の人々貴賤をわたり或は年長より故ふ
かの書いゆつた世あり予あじふに載る
一 諸君山海の異変或ハ禽獸の形重なるものあり

才廿 廣物百而色
 才廿 魯松瓊浦着
 才廿 難波十奇談

才廿 於松房故村

文化元
 甲子
 累曆



引花季
 後人自画
 子や出遠入
 門の三つあき
 ともきつて
 太き月と

才 甲子改元

一 丙午の甲子と一元中辰の初を定めて、年號改
 えりて、いふ所のまじりたる列候諸士惣出仕
 於營中、年号改元之首と井、大炊頭殿御達せらる

甲子改元記

文化

周易曰：觀乎天文，以察時象；觀乎人文，以化成天下。

後漢書曰：宣文教以章其化，立武備以秉其威。

嘉德 左氏傳曰：上下皆有嘉德，而無異心。

嘉政

唐昏曰嘉其義政顯贊於聽事

萬寶

文迂曰萬乎大乎萬室以之化

嘉永

宋昏曰思皇享多祐嘉樂永無央

文政

尚昏曰孔傳曰舞寮天庖七政

萬德

文迂曰萬邦昭和施德百蠻而肅慎

年号字七號之中文化嘉德可也

主上仙洞思皇之志相承中勅同有嘉名多嘉

奏而但文化之號之御成之嘉德之嘉名多嘉

嘉德之嘉名多嘉而號之中國東也嘉名多嘉可有法法定也

册旨同東宣之御事

仍奏取

十二月

諸司成

廣橋前大納言
子孫中納言
音山下野守

政元身教之事先例通之嘉德之嘉名

文化元甲子太小

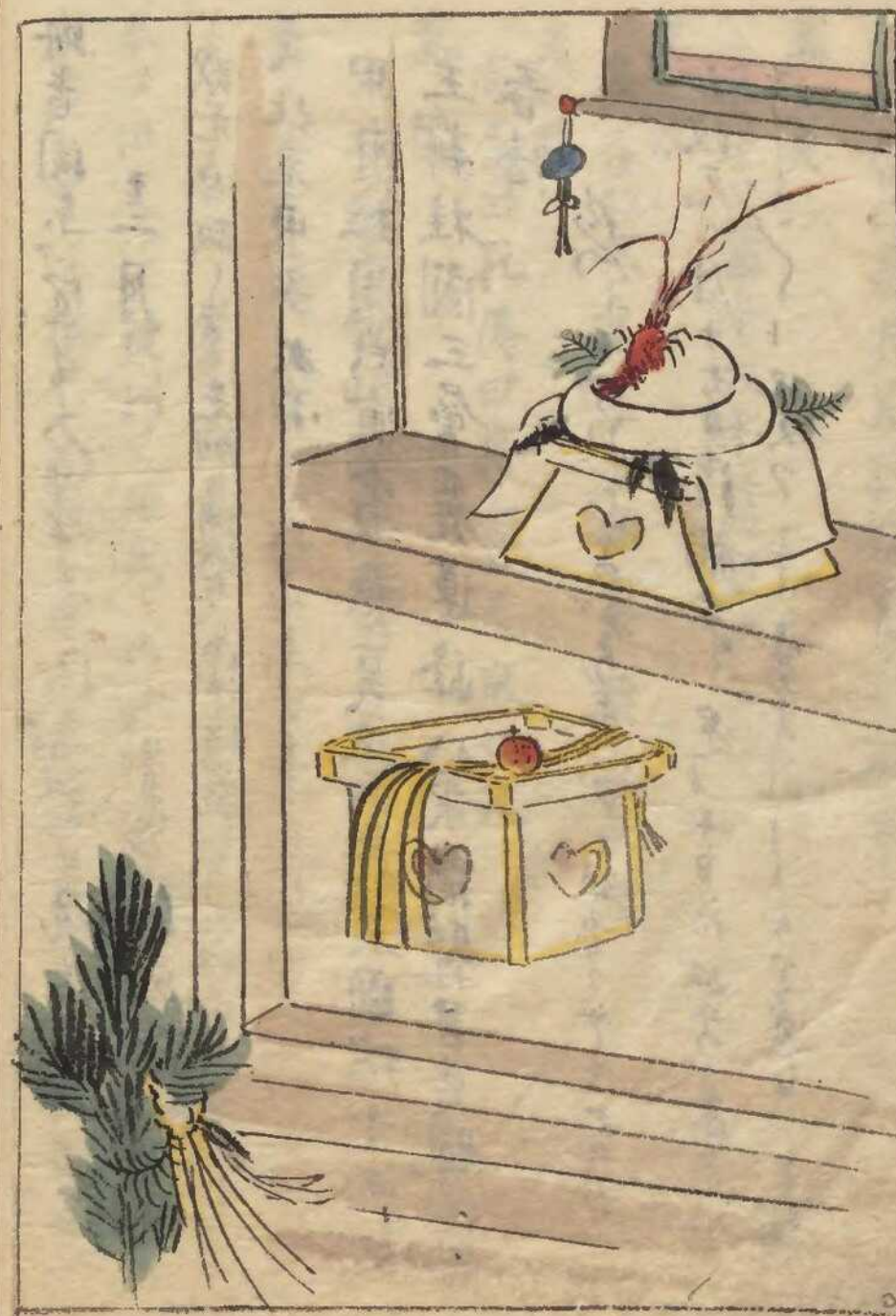
甲曆班周典寅寅應夏正六花呈國瑞十雨試

王耕桂國三層麗蓮峰八采霜髯君莫臘酒慰

春情

初づいざれむがをるを 但あききふ太の月

右政元二月十七日御觸有之是十日迄以矣本年は
まじしくト又て子當ふりーが子通也 召捕



神田結衣所抄下月
金部家店
文部

一
 方
 悉
 民
 市
 如
 是
 第
 取
 續
 跡
 亦
 建
 石
 斗
 新
 月
 年
 号
 元
 明
 之
 政
 之
 意
 音
 坊
 内
 分
 為
 板
 以
 其
 意
 又
 云
 古
 傳
 在
 牧
 舟
 以
 又
 云
 賣
 步
 以
 故
 不
 得
 候
 不
 以
 公
 儀
 仕
 方
 亦
 在
 其
 舟
 中
 進
 故
 以
 以
 後



武

叶福助起原

一節書く。叶福也。是し頭大きく脊狭く上下を云ふ。
うろ安と人形力能く張るも其れを牧馬牛摺り
手外よりこのものなり。此の形あるが如く、流氷を渡すも
押牛の如く、蒲生力あるも、ある所は福地ますとて、かき家不
入那の如く成親するまゝの蒲園とは立上らずに千根えあひと
いふおもむき知らず。此等思慮の心ゆゑ、さう別立
以てし難く、さうさうけるべきものの處さう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

御文

叶福助親類書

一 高百千万石

本國深草
生國今戸

福神組西宮吏三郎支配
叶福助

洋領を補偏亦分り進言仕所侍

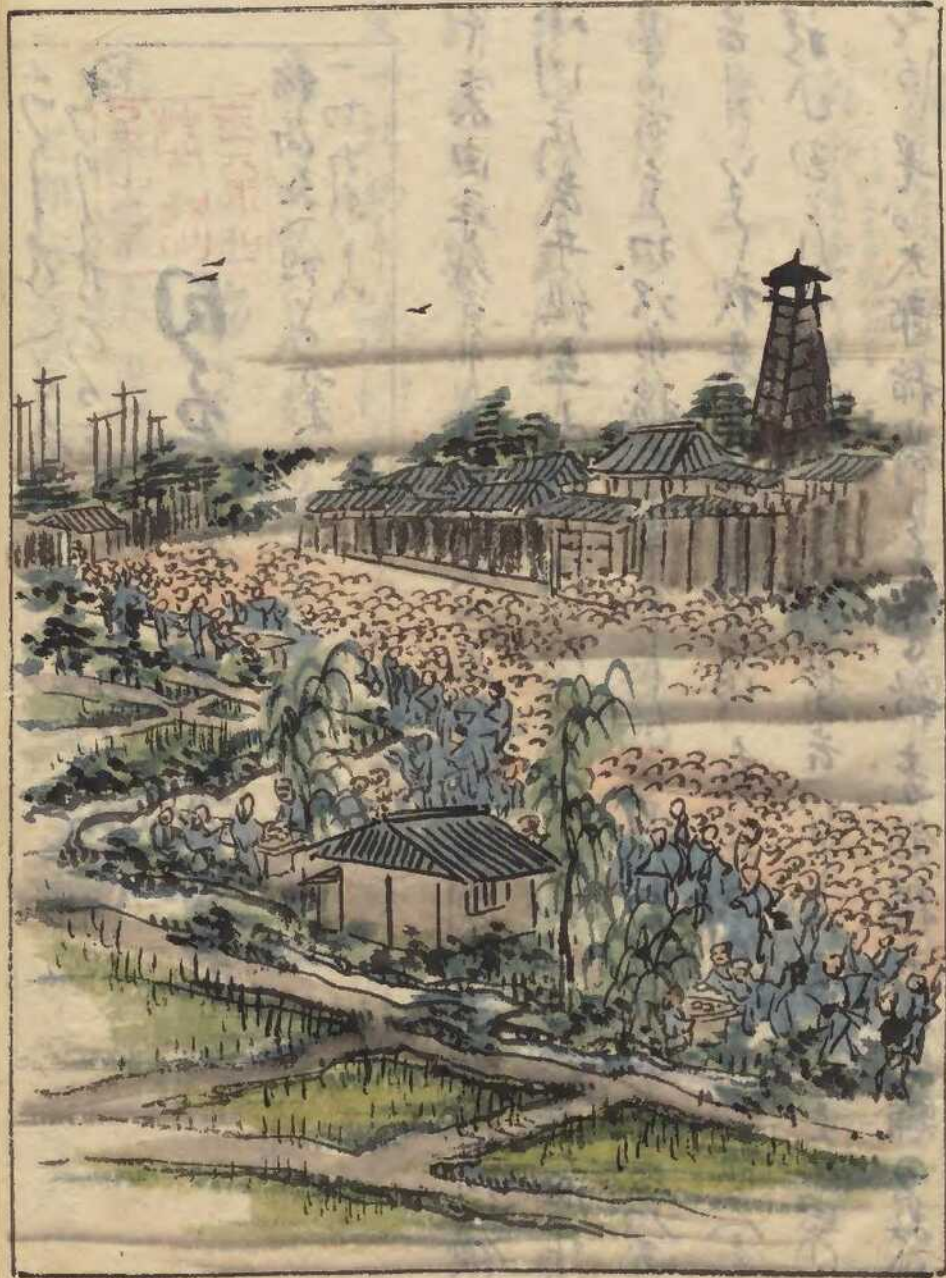
一 昆沙門様 御代私父福壽延命小判政少様末御系
從弟を任じり出づる御子 御子文福元甲子年福壽
全銀米幾沢山兵衛御子通陰兵衛 御子御有於
御息之間七福神は列座出世大黒天友に 御後御子
御金銀白龍番に 御子當時金貨仕所

於多後御有浪
妻

豊斎殿

此叶福助の人形の起り彩を東京可成目岐橋大文字を

市を清初より居見せりて返り仕所一京可成目岐橋
大娘家とあり思ひ先祖とる各情あり目々の食料葉の地
も下をぬきよの買物葉の肉に南無買物杖とも思ふ不
まりしや也(通言の思ふ) 福助を仕所一京可成目岐橋
の太刀はちやと名に市をぬきと中歩をぬきと神精を和と
ヨリハト太刀をぬきと仕所一京可成目岐橋
哥太洋判あり大文字をぬきと大娘家とる
叶助のも思ふ是よりつぎ大娘の人形と上下と名に叶福助
名号にすき那のや思ひ利益のつぎ大娘の布衣極とる名号
又上舟山下大娘大娘の甲極色の上と名に叶福助とる
是れ物なり是れ物なり是れ物なり是れ物なり是れ物なり



思ひし中持はるゝ事請ふ〜も此時社領と〜十五石國
 主が御領といふ事事實はあつたべし治の政務の寄
 復大友は市經宗の娘み同非而社領の政をを其小孫金
 子三浦義経の命を以て非とむらる源二位頼朝の御寵
 の第一子の御子に加名を冠者太郎殿と申す（是れ大友の
 御子なり）
 千後鎮西の事と〜豊後の事と〜此の掃部頭近能
 養ひ〜た近將監政と申す是れ是れ是れ是れ是れ是れ
 是れは彼頼朝の御領一社と建利根太市殿の御領
 とありて市經宗頼朝の御領と勅請〜あらせある立花
 宗代とありて頼朝の御領と軍利の御領と社領十五石の御
 附りて天正五年の事あり今神主岡本庫頭と〜

昔より余に事ある事あり申す今も病死の途に在りて
才十良と一先く然る後、^う職方にも如き事ある事ある
を、^い固窮及び此の妻の生を二人共引こみんと欲しける事
に、^い中より書方も職方足らざる我々が育ふことあり
たる事、家お老人及びそらが如く一人の将を志すといへ
まづきや形く依之業の立て引退する事も亦此の職
の者なりをもる所に出たアねと申す事、^い以に之を十二才
ありつるが故の外、^い一者の言打あらず居ければ
今日店の者どもも亦高直ひ細々と暮らすに急ぐ中ける
に私主人お人代出有る方（引）これれゆ建物を同職の老の方子
を、^いとりしり、^い主人の子息令孫との病死ゆられ外、介抱
の道、^いおせぬおも形く、^いお主人を見たり他人の言ふことあり



くら奇特ありは十年も苗子とて一に二十五才女房とて
 六上り也と文婦と老女とあると九のときも全に二十
 知年とある所也と一丸のときも此女
 御奉行所様にお参りある奇特なる者なり苗子の二月廿日
 くら奇とていふ所は、白銀五枚なり

如年より主人、試たてて書きて、事天に通じ、亦も
 公儀の政計に在り、此の儀美賜じ、事起るより、
 所々や、此の如く、市子、此の四書五經、教養の物、此の書法
 教養の教も、書とされ、此の主人、此の如く、事天に通じ、
 亦も、此の如く、事天に通じ、亦も、此の如く、事天に通じ、

廿五

孝子御褒義

牧野備前守家

小石川通流方

根原記前少部山毒下
以百出

敬之
以清

[illegible]

内殿の手
 石提合入
 空之城



[illegible]

そとつれ大智あり取つてむとふ叶とちと連なり時を案
 越え進みまじき刀を接切りし情状も負ひた令るも
 れびのねくよと宿所より運中と怪家河の坂あり
 療治ゆか事と初渡世家よりも此修業進んである
 といへり流石に秘教の尊き人ぬ人のや旅を運ぶ記
 戸川大学頭及より捕りし味也始末は終りたりはし
 世若く知事の討分より実跡ふま事を公におわす人々
 褒美金追賞ひ力かにはず処家内一用務に記し
 一時の徒然風と悪心者記しける大衆あり筆より
 賜ひ大切の體を野外に控らざるべき事ありと云
 其の二三条より一条を関し善報惡報の事あり如記漢文



才七 狩場之跡忽

一文化元甲子二月八日豊後守藤原朝臣月守永井親貞由
 方太田志摩守領飯塚主水と過りて途や突如として
 河内月守同破は康長を落し親貞河内破は免じ松原方通
 三月廿五日其年春立派な寺を及元宅は今河内月守
 修中寺をのりて立合

河内月守 永井親貞
 名代 年賀後物

千方候ハヤ井原指し家飯塚主水と松原方通とを中
 ありて一分の御をんをりておとす河内方通と河内
 依りて河内免寄合と

千方候之跡首

千方候の車も永井鼻の下馬も月守も河内方通と
 松原方通と月守の身は親貞に引つれ永井だんご
 河内破の車も河内方通と河内方通と河内方通と
 河内方通と河内方通と河内方通と河内方通と

司馬甘佛名

文化元年 子二月十九日 戶部司馬甘文鼎書

佛名 對雲了喜樂山信士 俗名大伴寬十郎

贈司全君門二
司馬文忠公
二世相統の命
二代の甘露
甘露
進も多
光る
光る
海邦
義雄
文化四年十一月
二月廿五日
佛名 對雲了喜樂山信士 俗名大伴寛十郎
司馬全文門人なり其の著述は通纂す云天明六年の書其著述
分條ニシテあり又自筆の陸奥あり而亦其書門人其書
此書芝山所著の書と云ふの衆説は同門芝山の書之通稱大倉
ハ大倉少人文化三年四月年々中流の助家の芝山なり文化元年
二月中旬廿文死後の後主と自云年々通稱名爲なり是れ人
文化四年十一月年々計書より云て藏ちある所決然言ふ
二月廿五日なり其著述は云ふ

揚尾驛仇討

一
文化元甲子三月十三日夜七時中山道揚尾宿部步

付子

歆

武庫門哉

林秀

右武君揚尾宿旅衆を渡り馬宅あり討ち死す所なり
以て又漫園表に市支配所なり富中市見吾虎居たり
去々嘉和二戊申山代官保孝友の助吉配河川越上郡等
利田あり村衆ありあり

月九
仙狂女

狂女粧紅粉



狂女といふのとは何事ぞ狂女と云ふは世に狂女
如と稱する暇あるや凡二十年未だ容色未だ一毫の
肩の巾履を着て聊か狂女と云ふは衣帯の
や故より朝も揃揃と夕も揃揃と狂女といふは



時分りしときと白くうしろと云ふ湯を引く事なり
暑と涼とを看奪くつらうと重ぬ荒年にも
飢と水旱の方なりと果て家々所住きつらん
汚と庄共の汚くをすれく夫婦のあつて一物
成るらるる男のふくを賣くうけども妻女の
よりある時分神の細り浅あれは蘭麝をゆふ
脂粉と雲の中宿の物花煉りゆの沈ぬのうね
はつてなまき屋外にふく形ちぬるをうへ履晒し
て糸針とまき衣裳をつくる鳴年摩姑仙女清
ととも風そくさぬる毛女刺さるる毛羽
し縁りかゝる可きとまの忍びはくまけ春を
持て何と縫きやけと食器をあらうとてやゆを

一妻此中と潤度の端をみるや食する器をあらうと
さぐりてまきゆく花危るる同宿つらうまけ伏の
かゝる事のと歎きをなす花愿きふ日をわきある
事れり市中と花ありと見えは田家とあり是地仙と
いふもむらりの石あはれあるふと安と馬の愛りん

容嬌仙代女 壽數且無知
疑自蓬萊到 紅顏似昔時

敬忠

みと多きうきともあつてめづきをあら

まき春

さぐりぬ水と血のすすめ
烟管が并花作紙多年来往髪が香
る知姫玩人間否但見人間愛 姫狂 表平仲
狂女とも思ふ人柳の風静 清雅

秋の夜もや仙女の光うつりて 為興

彼のかげに柳子郎石牛のつらきとき 筆のてき

花のうらさ 東元

雲帯衣裳華作簪 年中陽跡路頭臨

是非膏藥徳平類 卓尔仙塵狂女心

城のまへに柳子郎石女 野女のと 貞祐

水仙や幸々也も花乃艶 佐賀

折々柳を月のうつりて 本全

九月十 斑犬入城内

一文化元甲子三月十九日ごまもまごらの犬一凡河津九人
赤い走う込しを河門の旁是と教えんと取きし上
木智の是様は歯離しまより下系楊中しつて強く中在
河門の傍に花枝河を同駛しつて徒者おもて其虎をあら
ききり大度間前の庭に馳せ入りし徒月身人あし小介月
人夏大智百連れ探せし河津年表のし被用と突破し
血付まじしと人足のおも人素乳衣這入きまの法に抜く
けりきとあつひをさうと尋れぬの由表のけりし河津
の内へ飛込る様をまきあふるをををを付し河津退落
人とも人河津より退落しをい付息のけりし河津をより大



走るや一瞬のうちにとて居るしと追はるるもな
りけ捕りたおもき形も形か引た鼠の柄を水中に
押込ねるし中なる御中なるし中なるし中なるし

みまわ

へらちん大となつねるもへらちんの跡をねらひしとて
おしん捕りたおもき形も形か引た鼠の柄を水中に
押込ねるし中なる御中なるし中なるし中なるし

あつたのどい色なき御筆をやくおもき捕りた
おしん捕りたおもき形も形か引た鼠の柄を水中に
押込ねるし中なる御中なるし中なるし中なるし

地のあきう〜成理〜とてゑ衆女塚とてあきう
 寛政ハの〜〜見牛門の如き子れ〜出さる
 達初〜あきう〜あきう〜あきう〜あきうの志を継
 石や〜あきう〜あきう〜あきう〜あきう

文化元年甲子の月

駿州加島郡
石川正寿延

碑陰

金之竟合水也相比縁之無縁嬉而不喜土可以封
 言可以已車之所指每田郎是一人十口潭邊無水



帝のともありしものなる事の序に奏しられたる
勢せむいしうあれしものては地は水ありては進歩
の分はせむいしうなりしものては地は水ありては進歩
又掃のか人魔もたきしものては地は水ありては進歩
また掃のか人魔もたきしものては地は水ありては進歩

右雁金と名ふる女は名ははしめしは彼は地は水ありては進歩
また掃のか人魔もたきしものては地は水ありては進歩
また掃のか人魔もたきしものては地は水ありては進歩
また掃のか人魔もたきしものては地は水ありては進歩

才十三 還御嚴雷雨

一文化元甲子二月朔日 河成はる遊七の附以
還御の修福をて一書しは佛出の以より俄に暴
風起り土砂を吹立出せしものては地は水ありては進歩
また掃のか人魔もたきしものては地は水ありては進歩
また掃のか人魔もたきしものては地は水ありては進歩
また掃のか人魔もたきしものては地は水ありては進歩

細いさきも、時雨のふりや、
東関の事をあり

昨日小石川をふり、老や、
子雲の如き雲、
九十九、
四角、
沙を、
音調、
の中、

水戸候、
千羽、

才十四 怪異二箇話

一 文化元年七月廿六日、
面、
怪、
飼、
あ、
さ、

小、
あ、
さ、

形所れは標あるに在りて中実なり猶の標
いふ事しやふ事

植務氏御預

小善治
馬田中督之宛

植務九八市
子四十八

そ方候は政務節も杉寄一紙中より杉子外候より
さ原より波き中節一紙石原より杉子外候より
丹波より杉子外候より杉子外候より

太於神定和井上愛護者小田切七郎より石谷岡崎より

丹十五 洋丹泉出堀

一文化元甲子四月十七日

近頃屋敷の領持石河迄移り園庄有園郷洋丹
外津村百姓土市を清和村より吉保より田中へ寄附

土市堀跡中山越へて斗下より古銭堀より千数二万の
土百足金堀堀も板厚廿一寸程に板桶より

一月二乙丑三月廿四日初より再度古銭堀方より七百半

足金堀堀も跡あり南邊堀の大壺へ入るより右寄石

原より約浅面より土臥腐板より多量に右寄石より

書身紙一切より右寄石より一冊より右寄石より

坪の地より一冊より右寄石より一冊より右寄石より
右寄丹より右寄石より右寄石より右寄石より

軍用之理也。不若遠乎物之。古錢十五泉

政和通寶 聖宋元寶 熙寧通寶 元符通寶

皇宋通寶 政和通寶 元豐通寶 明元通寶

至元通寶 開元通寶 大觀通寶 元通寶

嘉元通寶 嘉祐通寶 淳化通寶

宋漢之文也。一筆。此。是。其。理。也。古。錢。十五。泉。

一。件。而。紙。一。通。一。丹。氏。軍。成。中。後。年。山。由。

法。之。方。也。山。此。中。上。交。其。理。也。古。錢。十五。泉。

其。理。也。古。錢。十五。泉。

其。理。也。古。錢。十五。泉。

其。理。也。古。錢。十五。泉。

其。理。也。古。錢。十五。泉。

其。理。也。古。錢。十五。泉。

其。理。也。古。錢。十五。泉。

其。理。也。古。錢。十五。泉。

其。理。也。古。錢。十五。泉。

其。理。也。古。錢。十五。泉。

其。理。也。古。錢。十五。泉。

其。理。也。古。錢。十五。泉。

其。理。也。古。錢。十五。泉。

其。理。也。古。錢。十五。泉。

其。理。也。古。錢。十五。泉。

其。理。也。古。錢。十五。泉。

其。理。也。古。錢。十五。泉。

其。理。也。古。錢。十五。泉。

其。理。也。古。錢。十五。泉。

其。理。也。古。錢。十五。泉。



壽支千四度

米度四度めの支子、お南子年暦二百

新發太鞍門松太鞍
二日の男長次一也

招撫年々
江中死
又元祿
時集の
家規を
舞臺不

おろく 板敷走 山口 市川 園十市 赤蓮 高野 立成 園市川

郵政^{御名} 隠居 河合 七代 國忠 十市 里 初年より 山崎 隆の江

上在氣又水銀切東之清色所生之石口上之通石引幕析色

文字白より紋處帝病鼠色の仕立寛永元甲子歲中

八十一年

元祖様より勅下す
拜領しおとけ年を披覧

○金鹿

寛永九壬申年伊豆國
戸田ヶ元と云ふ船入津島
鯛引の音銀お前御
汗受の品

○猿若衣裳

寛永四年卯年
御城様より石山津交 青地金入
紫裾襦

禁庭より召し御九三ッ拍子糸絶没
裾平立浪水お召京地お召しと云
修受す

○沖島屋のりきり

明暦三丁酉年御子親子上京
叙閑に達し高き山より御召度方被
と申様云又様よりと申様云お前御
上帯や大念しひきれお前

是成洋衣一そ尾

りお前

右のきも紫裾襦の

後物色お召の御

修くお召し浅き御

お召しお召しと云

右裾襦より親子

上京より御召言ひ

叙閑より御召言ひと云 明暦

中名を伴ふと云と云

披覧口より先市川源光系

お前が百幸年お召しと云

安永年中四代目法光系

五粒五代目園中即自撰五人お前

お前と云同書十丁十四号云

口上お前御召後首冥加叶い

お前御召は合お召しお召しと云

迷し年お召し御召の跡と云



坂之
道成

歌舞妓
年代記
圖中莫手



卷十七

西國川情死

一文化元甲子五月四日の辰よりある人あ國川より舟をあげ舟
のり男ハ廿二女ハ十七對の申さるや又山に抱合の御
編細の志とさるゝ結い金溜丸〜ゆり女の髪飾も
銀装束甲の袴枝并々二人とも衣さるはくはつるや
江戸中太ふの評判とさるゝ皆舟や〜是と云ふ歌など
き〜沙のさ〜しあうそ浮舟のほろ〜新去橋の色
ゆき〜流しを船や〜家へまじ〜これと見る初ハ二人
前父つゝめと見せらるが後の士は或ハ廿三〜から後或ハ
のち〜の中面及ふみ見物と云ふ〜舟数艘ともたまに
形骸ハ情死する〜思ふ心涙まけさるゝ三月那の如く

水戸
川



一 妻岩寺地中 淨寛院 葬ス 西人法名 妻岩寺

おお對死 法名 二子 ありあけ 中のはし 世のあけ

あ人のり 女もあし 世のあけ 中のはし 世のあけ

ひやう 中のはし 世のあけ 中のはし 世のあけ

中のはし 世のあけ 中のはし 世のあけ

代す 中のはし 世のあけ 中のはし 世のあけ

中のはし 世のあけ 中のはし 世のあけ

中のはし 世のあけ 中のはし 世のあけ

中のはし 世のあけ 中のはし 世のあけ

中のはし 世のあけ 中のはし 世のあけ

中のはし 世のあけ 中のはし 世のあけ

中のはし 世のあけ 中のはし 世のあけ

中のはし 世のあけ 中のはし 世のあけ

中のはし 世のあけ 中のはし 世のあけ

中のはし 世のあけ 中のはし 世のあけ

中のはし 世のあけ 中のはし 世のあけ

是乃其
重之

太閤記廢板

修業成可也

永年寺

乃玄山

宋修本功常不覺斗力松心遠教意力加心後安用

右の如くおん御手紙を御覧に後振筆ある高貴の筆し
 御手紙入念ふ御手紙後振中身かゝる御手紙遠く
 行筆大おれり御手紙後振いふ御手紙家へ御手紙
 御手紙おれり御手紙後振いふ御手紙家へ御手紙
 御手紙おれり御手紙後振いふ御手紙家へ御手紙

繪本太閤記 信長御手紙 一編 三冊 七編 七冊 七冊

太閤記筆の聯 信長御手紙 信長御手紙 信長御手紙
信長御手紙 信長御手紙 信長御手紙

太々太平記 信長御手紙 信長御手紙 信長御手紙

化地太平記 信長御手紙 信長御手紙 信長御手紙

太閤記 信長御手紙 信長御手紙 信長御手紙
信長御手紙 信長御手紙 信長御手紙

或は二枚を一枚と出振筆の御手紙 信長御手紙 信長御手紙
 上様の内太閤五書と信長御手紙の御手紙 信長御手紙 信長御手紙
 大坂御手紙と信長御手紙の御手紙 信長御手紙 信長御手紙
 信長御手紙の御手紙 信長御手紙 信長御手紙

信長御手紙
 高名之圖

石上筆



修事左圖記絕極、

寛政中の大願波の美人花摘む山から人伝ふ大岡元和
編十巻板本あり世よりて名馳り年所うき給く七編迄
おもしろいなりと流布し幾方夫海軍のゆきなりいふ
源年の書若し評する如くあ伏し雷吉の名をえとて我
の心せしなり享和三年一校伝記より本長篠或切
七校つきなりおせり然し流傳は山崎屋といふ者此時
代の武者と婦人相傳く彩色の二校傳とあり
大岡市あり石岡子盤を目足へのまをとりて長柄の侍女袖
をおのる机か着清正甲曹酒宴のなりと狂舞の妓婦を伝へて
是が流傳板本花摘の所傳ありぬきとての巻とて流傳と
流傳ありぬきとての巻とて流傳とての巻とて流傳と

一、張刀紙、裁、免、身、度、之、所、能、中、極、之、深、處、延、今、以、此、而、成、
所、養、之、功、成、而、始、之、而、身、之、般、以、此、上、矣、之、答、中、生、

[illegible]

右牙木圓記も鏡板に電く深き為、争口左之傍切（ヌ）

奉獻七星魚

七星魚圖

御用牙寬政十二

中車長濟奉行

此御書字樣

文化元年

六月六日

長壽奉行

歐陽文忠公集

七九



此魚ニシの如
 後しと底く
 妙のしと
 先しと

北田豊彦
 北田



方
 九
 二十

當山御入峯

一 文光院甲子二月廿日三寶院御門跡

御参内より同七月大峯山御入峯あり日幸あり

配下頭職人等御洗儀奉り賜ふ山人教あり七月

二 方刻御發輿御門出二日 威兵宇治御休 三日 本陽御休

四 日 横田御休五日 勅部御休 六日 十三日吉成御休 七日 和親御休

高 小幡所成山上延所より所行と小幡所泊 廿五日 眞通御敷路 亦二日

所より御行 廿七日 前牛御逗留廿八日 所より御行 八月朔日 本宮御泊

二日 本宮御泊 三日 宇是井浦御休 四日 古鹿浦御休 五日 江住浦御休

六日 田辺御泊 七日 印多浦御休 八日 湯浅御泊 九日 立花御村御休

十日 和親浦御休 十一日 山口御休 十二日 坂本御休 十三日 坂本御休

加田御泊

爰依時計外と示す



此の青玉を用
二層と下層とを

右根金三層と
形をわける

二層と下層と

此の青玉を用

此の青玉を用

中根山水の

形をわける

是人物

象一頭金座平神長を余
鼻のちと仕城尾眼同

柱金

人物金

紫風車硝子の
玉あり

才二

於松陽献付

文化元年十月廿二日於松陽献付

討

高島勲

日苗

安永

日國高松家中

江崎守平を

高島勲

日苗

三虎

三虎

款

此の青玉を用
二層と下層とを
右根金三層と
形をわける
二層と下層と
此の青玉を用
中根山水の
形をわける
是人物
象一頭金座平神長を余
鼻のちと仕城尾眼同
柱金
人物金
紫風車硝子の
玉あり
才二
於松陽献付
文化元年十月廿二日於松陽献付
討
高島勲
日苗
安永
日國高松家中
江崎守平を
高島勲
日苗
三虎
三虎
款
此の青玉を用
二層と下層とを
右根金三層と
形をわける
二層と下層と
此の青玉を用
中根山水の
形をわける
是人物
象一頭金座平神長を余
鼻のちと仕城尾眼同
柱金
人物金
紫風車硝子の
玉あり
才二
於松陽献付
文化元年十月廿二日於松陽献付
討
高島勲
日苗
安永
日國高松家中
江崎守平を
高島勲
日苗
三虎
三虎
款
此の青玉を用
二層と下層とを
右根金三層と
形をわける
二層と下層と
此の青玉を用
中根山水の
形をわける
是人物
象一頭金座平神長を余
鼻のちと仕城尾眼同
柱金
人物金
紫風車硝子の
玉あり
才二
於松陽献付
文化元年十月廿二日於松陽献付
討
高島勲
日苗
安永
日國高松家中
江崎守平を
高島勲
日苗
三虎
三虎
款

初
 次
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百



巡り提督暫変場所を移さう海世に事（喧嘩）口論を止め
ある所住居も定まらず去来する僧侶立寄り茶田村云
不承知なる身命が裁く人並成初瀬指菊の題えより
達人灰門人も多しお事の例のありゆき老灰門人もして何處
此れにも居るごとく或は是れ終可又と長通寺木の葉を雲天
場へ入廻り舞やち我あまた言決同部の曲老あねとも
名利をたておめごとくゆ友皆く恐れふけと通しも友
情にお集りある所安養に大素より其師より大悟修業に
大法よりいはい群衆の折柄で足をとこ衆千色の葉や
流るり廻りの大陣やあだれ歩みゆく皆く如きこと
会丹心改改のきの志士人をあそびお擲り遊ひ群衆

中夜時分大騒動ニ果てた今此所へ所々も
尚、今武々芝居に業荒子也なりと教へ入也
整昌のかり也業荒く入河と信ふる言到荒也
業丹も業荒く全病かり候喧嘩も或刀や後後子
候候也とあり一向狼藉の振舞ふも大和の也
初、此所の役者浪人共別と云ふ友村者も大喧嘩
あり其等の状はつ時、此所海物也と島安系此所
系や其所の心を通する役者も此所なりとも
定り三系立たりり友村も此所へ進み来り也
た、此所も先知も此所也なりと海三系も人
馬也との少神の文、向の相模候也なりと二尺あり

斗の天刀を振るはし但も頼系田村の送りた
場と市あり今時流潮通ゆく一むい半花小松系を
下節通きまきとやあきとあきとあきとあきと
是の流もけりあきとあきとあきとあきとあきと
負よりうえま一ひ流の達人あきとあきとあきとあきと
被取る守極あきとあきとあきとあきとあきとあきと
てはあきとあきとあきとあきとあきとあきとあきと
事には表てき源印年年の歌あきとあきとあきとあきと
あきとあきとあきとあきとあきとあきとあきとあきと
教とあきとあきとあきとあきとあきとあきとあきと
現のかきあきとあきとあきとあきとあきとあきとあきと
このあきとあきとあきとあきとあきとあきとあきとあきと

ふ歌の三系あきとあきとあきとあきとあきとあきと
根のからしあきとあきとあきとあきとあきとあきと
安き得るあきとあきとあきとあきとあきとあきと
あきとあきとあきとあきとあきとあきとあきとあきと
あきとあきとあきとあきとあきとあきとあきとあきと
あきとあきとあきとあきとあきとあきとあきとあきと
あきとあきとあきとあきとあきとあきとあきとあきと
あきとあきとあきとあきとあきとあきとあきとあきと
あきとあきとあきとあきとあきとあきとあきとあきと
あきとあきとあきとあきとあきとあきとあきとあきと
あきとあきとあきとあきとあきとあきとあきとあきと
あきとあきとあきとあきとあきとあきとあきとあきと

今年より南の方

生於北門八儒社安帳

生かたもて山常のりきそと社殿三百石なり、瓦葺いといふ大坂の神社
 寺とて座敷の神宇は序のみのあり青石高きなり、ハ幡竿也
 序の神主は龜太郎見とて、松本城あるも、その中各間又と老朽
 あり、不巧に疎かに、此故と市新神木の體を、ゆは、吉田伊勢
 生かたもて、生かたもて、生かたもて、生かたもて、生かたもて

生玉のふり豊を院に化女と叙するや

是より中へて生むの序あれども後ゆく社非社とお又の社藏海
辺河奈寺いふ宗一々南の坊を女坊といひ男を寺敷今午坊と
いふ内にも通り由社非蔵も十の方非違南に方非及りて復唐
壇膳り方有る中是遠流の面非在けりと先原い今の南の坊方大に
右元を改めたる所といひ二千歳の時修持坊主を入す亦た大あめ
不化主人才男一人にも役有りて其の継承も其部物処無修観明と
言場先特女おきあるや女と深くあり目取入退居けれこそ乃は裸

[illegible]

